

## カルガリーで得た教訓 What I Learned in Calgary Visit

早乙女 誉

Homare Saotome

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

Graduate School of Sport Sciences, Waseda University

スポーツ科学研究, 8, 293-293, 2011年, 受付日:2011年10月4日, 受理日:2011年10月4日

今回のカルガリー大学との交流事業(2011年9月7日～9月9日)に参加するにあたって、私は2つの壁に悩まされていた。1つは、これまでの交流事業(ラフバラ大、上海体育学院)の参加者の報告にあるように、言語の壁である。取り立てて英語が得意という訳でもない私にとって、どの程度コミュニケーションがとれるか不安であった。次に、2つ目の壁として、研究分野の違いも私の気持ちを内向きにさせた。訪問したカルガリー大学は、バイオメカニクスを専門とする研究者が多く、その分野において世界でも有数の大学であり、同行メンバーもこれに類する分野を専門としていた。もちろん、参加を希望した時点ではそれなりに覚悟を決めていたが、実際に現地に行くとやはり言語や分野といった壁からプレッシャーを感じた。

しかしながら、交流を終えた感想としては、「壁は自分自身がつくっていた」ということである。今振り返ると、このような思いを抱きかけとなったのは、現地でのミーティングで川上泰雄先生がおっしゃった一言である。川上先生は、「カナダ人は他国の文化を受け入れる気質がある」「上手ではない英語にも耳を傾けてくれる」といった話から「臆せず積極的に議論するように」とのアドバイスをくださった。その言葉通り、カルガリー大の研究者は、全く分野が異なる私の研究に対しても、興味を示してくれた。拙い英語での説明に対しても積極的に質問してくれた。このような、彼ら彼女らの「理解しようとする姿勢」と事前ミーティングのおかげで、私の気持ちは切り替わり、予想以上に充実したコミュニケーションをとることができたと実感している。

また、今回の研究発表が、約20題のポスターを

掲示した部屋の中で、自由にディスカッション(約2時間)する形式であったことも、コミュニケーションの促進に寄与したと思う。私が、カルガリー大側のポスターを眺めていると、そのポスターを作成した研究者がやってきて内容を説明してくれた。その後は「君のポスターはどれだ」となり、今度は私が自分の研究を紹介する番となる。また、研究とは関係ない話をしているところでも「ところで君のポスターはどれだ」となり、自分の研究を紹介することになる。このようなカルガリー大の研究者の「相手の研究に興味を示す姿勢」が、自由に議論できる発表形式の中で、私に言語や分野の壁を越える機会を与えてくれた。

以上のように、カルガリー大の研究者の積極的かつ好意的な姿勢のおかげで、私は事前の不安に反して前向きな教訓を得ることができた。この経験は今後のGCOEプログラム(特にシンポジウムのポスター発表)で活かしていきたいと思う。例えば、できるだけ他のメンバーの研究に興味を持つよう心がけ、ちょっとでも気になった研究があれば説明を求めてみる。また、自分のポスターを見てくれている人がいれば、臆せず自分から質問を求めてみる。もちろん邦人学生、留学生問わずにだ。これまでのシンポジウムのポスター発表を振り返ると、研究と関係のない話をしている時間や、誰も話をしていない時間が多かった。いきなり「誰にでも積極的に」というのは難しいだろうから、まずは心構えだけでも変えていきたいと思う。それと共に、今一度、自分がこのGCOEプログラムという貴重な機会をどのように活用し、何を学ぶべきかについて再考していきたい。

今回の交流事業でこのような考えを抱くに至った過程では、カルガリー大の研究者以外にも同行したメンバーからも大きな影響を受けた。流暢な英語でカルガリー大の研究者とお互いの研究について議論したり、それ以外の話題でも盛り上がるメンバーを見て、自分の目標を再認識することができた。また、言語の壁をものともせず、その分野の第一人者と果敢に議論をするメンバーの姿に感化され、自分も積極的にコミュニケーションをとろうと意識した。さらに、同行メンバーの現地での行動以外にも、皆さんの普段の研究活動やゼミ内の状況についての話などが聞けたことも非常に良い刺激となった。今回の同行メンバーとはこれまでに全く話をしたことがなく、専門も大きく異なっていただけに、その話は新鮮で、多くのことを学ばせてもらった。このような GCOE プログラム内での横のつながりができたこともこの交流事業の成果だと実感している。

今回、見学させて頂いたキネシオロジー学部 4 階建ての施設には、各種実験室(バイオメカニクスや生理学、化学など)や教授らのオフィス、学生たちの個室が配置されているのだが、このビルが 1 階から 4 階まで吹き抜け構造になっている(写真)。そのため、空間的な広がりもさることながら、人と人とが顔を合わせ易い環境になっていることで、気持ち的にも非常にオープンな雰囲気が感じられた。例えば、最下階で行われる動作解析の実験はどの階からも見ることができるなど、他階とのつながりが感じられる構造になっている。また、休憩に適した共有スペースが配置されているのも、この雰囲気づくりに一役買っているのだろう。このような環境要因が、分野や立場を越えた研究者間のつながりや、活発なコミュニケーションに影響しているのかもしれない。

翻って、我々が所属する早稲田大学スポーツ科学研究科の施設を見てみると、専門が異なる学生間のつながりが希薄になりがちな環境になっている。キャンパスは埼玉県所沢市と東京都西東京市にあり、所沢キャンパス内でもメインの校舎とフロンティ

アリサーチセンターとに分かれている。それ以外にも、学外の研究機関で活動する学生もいると聞く。これまでは、このような環境は至極当たり前のことで、何も違和感を抱いていなかった。しかしながら、今回、同行メンバーやカルガリー大の研究者から受けた刺激を考えると、このまま他の研究室や学生とのつながりが薄いままでは、少々もったいない感じもする。もちろん、施設を改修して環境を変えるという訳にはいかないが、自分自身の心持ち次第では他の研究室の学生とのつながりを強め、自分の研究の糧となる刺激を受けることができると思う。私自身、とかく海外とのつながりに魅力を感じがちだったが、今後は同じ大学内にある貴重なつながりにも目を向けていきたい。このような意識を芽生えさせてくれたのが今回の交流事業であり、それを実践するに相応しい環境が、この GCOE プログラムであると改めて感じている。現在、博士後期課程の折り返し地点、これからは言語や分野の壁、物理的な距離を越えて、多くのメンバーと切磋琢磨していきたい。

最後になりましたが、今回の交流事業をご支援くださいました拠点リーダーの彼末一之先生、中村好男先生、川上泰雄先生、事務局スタッフの皆様様に心からお礼申し上げます。特に、トラブルだらけの出張に帯同して下さった研究院助教の宮本直和先生には大変お世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。



写真 吹き抜け構造になっているカルガリー大の施設